

『神の恵み③・神の家族へ』

'22/05/22

聖書箇所: エペソ人への手紙 2 章 17-22 節 (新約 p.375)

多分、皆さんは、自分が何かのグループに所属している！自分も、その仲間だ！と思っていたのに、何かの機会に、そのグループから部外者扱いをされて悲しかった、というような経験をお持ちだと思います。確かに、そういったようなことは、日常茶飯事的に…、つまり、よく起こり得ることだろうと思います。

じゃ、皆さんは、真の神様が御造りになられた「神のグループ」に所属しておられるでしょうか？…このことは、私にとっても、また、皆さんにとっても、かなり重要なことです！…と言いますのは、もしも、私たちが神のグループに属していないとなると、それはつまり、私たちが、まだ神様と敵対関係にある…、救いの恵みに預かっていない！ということの意味しているからです。…どうぞ、今日もまた、聖書のみことばから語られる、このメッセージをお聞かせください。

命題: 神が与えてくださった救いの恵みとは、どのように素晴らしいのか？

さて、前々回から、私たちは、神様が与えてくださる、「救いのすばらしさ」について学ぼうとしています。今日は、その最後3回目となります。今日も、エペソ 2:11-22 のみことばから、神様の与えてくださる救いのすばらしさについて見ていきたいと思います。そうすることによって、ここにいらっしゃる皆さんがますます…、自分のような者を救ってくださった神様のことをほめたたえる者となっていられることを願います。今日は、特に、エペソ 2 章の 17-22 節の部分を学んでいきたいと思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 2:11 以降をお聞かせください。

I・神の 祝福 に招き入れられた！(11-13 節)

まずは、簡単に、これまでの復習をさせてください。この 11-13 節で学んだこと…、それは、神様が私たちクリスチャンたちのことを、神の祝福へと招き入れてくださった！ということでした。11-13 節には、こう記されています。

- 11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、
- 12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあつて望みもなく、神もない人々でした。
- 13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

このみことばが教えてくれていることは、神様から選ばれた選民であるユダヤ人たちと、そこから漏れた私たち異邦人との違いです。パウロは教えてくれています、「あなた方は異邦人であつて、かつては、神様の恵みから遠く離れていた。しかし、そんなあなた方も今、キリストの血によって、神様の祝福に招き入れられたのですよ！」って…。イエス様は、ユダヤ人たちだけでなく、私たち異邦人たちにも、救いの恵みを与えようとして、今から 2000 年近く前、あの十字架と復活によって、罪の贖いを成し遂げてくださったのです。そのように、天の神様は、私たちのことを決して放ってはおりません！感謝なことに、今は恵みの時、救いの日なのです。

II・敵意を 和解 へと変えてくださった！(14-16 節)

そして、先週の礼拝で私たちが学んだ2番目のポイントは、私たち人間たちの間にあつた敵意といった問題を、神様が“和解”へと変えてくださった！ということでした。エペソ 2:14-16 には、こう記されてあります。

- 14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、
- 15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、
- 16 また、両者をつつのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

少し前の礼拝で学んだように、イエス様の時代、ユダヤ人たちの多くは異邦人たちを蔑み、憎んでさえおりました。一方、異邦人たちも、ユダヤ人たちのことを憎み、彼らのことを敵対視しておりました。…しかし、そのような憎しみ合いといったような問題は、イエス様の時代だけでなく、いつの時代…、また、どこの場所であつても起こっているのではないのでしょうか？

例えば、今で言えば、ロシアのウクライナ侵攻です。今、あの戦争？のために、どれだけの人たちが命を奪われ、また、憎しみ合っているのでしょうか？先週も言いましたように、ある方たちは、「宗教なんてものがあるからいけないのだ！また、“国と国”なんていう違いがあるからいけないのだ！」というようなことをおっしゃいます。でも、じゃあ、そういったような敵意、あるいは、憎しみ合いといったような問題は、所謂、無宗教の人たちの間には起こっていないのでしょうか？あるいは、同じ学校内、同じ会社の中、あるいはまた、家族の間ではどうでしょう？…残念ながら、仲良くしていると思っていた子どもたちの間で、激しいいじめが起こっていたり、本当は親しいはずの家族の中でも殺人事件が起こったりしています。

そういったことから分かるのは、宗教が原因なのではありません。国と国、民族と民族、あるいは、文化の違いが1番の原因なのではありません。それらは皆、単なるきっかけであつて、根本の原因は、私たち人間が抱えている罪なのです！…そうじゃありません？だから、私たちは、その罪を清め、私たち人間を和解させてくださる真の神様を信じ、その神様によって変えられていくことが必要なのです。

実は、そういったことをイエス様がしてくださるのです！だから、本来、キリスト教会には、憎しみ合いや敵意といったようなものが無いはずですが。…と言いますのは、そういったものはすべて、イエス様が、あの十字架にかかつて、私たちの抱えていた罪すべてを負って、裁かれてくださったから…。だから、もしも、私たちクリスチャンが、そのイエス様のみことばに従って生きていけば、様々な憎しみ合いや敵意などといったようなものは無くなっていくはずなのです。

しかし、現実には、悲しいかな、そうではありません。…それは、私たちの罪が、完全には消滅していないからです。確かに、イエス様の十字架によって、私たちの罪は完全に赦されました！しかし、それは、神様からの視点、あるいは、私たちの立場でのことであつて、実際に、私たちのからだを構成しているこの肉体には、まだ、罪の性質が残っています。だから、私たちは、この神様から力を頂いて、その罪の誘惑や罪の力と戦っていかないといけないのです！…そこまでが、ここ2週間の間に、私たちが学んだ内容でした。

III・神の 家族 としてくださった！(17-22 節)

さて、今から私たちは、最後3つ目のポイントを見ていきましょう。救いのすばらしさ…、それは、神様が、私たち救われた者たちの全員を、神の家族としてくださった！ということです。神様によって救われた私たちは皆、同じ神の家族…、主にある兄弟姉妹であり、また、共に一つの共同体にされたのです。17-22 節には、こうあります。

- 17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人々にも平和を宣べられました。
- 18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができます。
- 19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。
- 20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。
- 21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、
- 22 このキリストにあつて、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

●キリストの宣教と、御霊の働きによって…

ここ 17 節は、『それから…』という言葉で始まっています。ここで使われているギリシヤ語の言葉(καί)は、英語で言うところの、「and」というような言葉なので、『それから…』と訳すこともできますが、「それにも…」とも訳せる言葉です。…ですから、ここ 17 節の内容を、必ずしも、この前の節の時間的後の出来事と考える必要はありません。

確かに、イエス様は、『遠くにいた』異邦人たちにも、また、『近くにいた』ユダヤ人たちにも、平和を宣べ伝えられました。イエス様は、そういったような人種の区別なく…、平和を宣べられることを願い、それをイエス様の後、特に、弟子たちが実践していったのです(マタイ 28:18-20)。

このことも、少し前、皆さんにお話したのですが、神様のみこころは、イスラエルの人たち“だけ”を特別に選び、彼らを救うことだったのでしょうか？それとも、神様のみこころは、イスラエルの民たちだけでなく、異邦人の私たちも救われることを、最終的に、神様は願っておられたのでしょうか？どちらだったでしょう？⇒イスラエル人たちだけでなく、私たち異邦人たちも救われることを、神様は間違いなく願っておられましたよね！…だから、創世記 12:3 で、神がアブラ(ハ)ムに語られた、『あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。』という言葉からも、はっきりと、神様のみこころを私たちは窺い知ることができるわけです。

だったらですよ…、私たちは、この平和のニュースを…、この福音のメッセージを、私たちだけの所に留めていても良いのでしょうか？実は、この当時のユダヤ人たちは、救いを自分たちだけのものであると、傲慢にも…、また、愚かにも、勘違いしていました。しかし、現代の私たちクリスチャンも気を付けないといけないのは、「自分が救われているから、まあ良いや…」となってしまうことです！Ⅱペテロ 3:9 に、こうあります、『主は、ある人たちがおそいと思つているように、その約束の事を遅らせておられるではありません。かえつて、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであつて、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。』⇒本来なら裁かれるべき私やあなたが、神様によって救われたのなら、私たちも、この福音を…、救いのメッセージを、それぞれ誰彼の区別無く、語っていかねばおかしいですよね！

その後、18 節、『私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができます…』とあります。以前、13 節のみことばを見た時、「遠い、近い」というギリシヤ語の説明をさせていただきましたが、ここ 18 節で、『近づく』と訳されているギリシヤ語の言葉(προσάγωγιή)は、それらとは全く違う言葉が使われています。実は、この言葉は、「～の前に、～のもとへ」という前置詞(πρός)と、「導く、連れていく」という動詞(ἄγω)との合成語で、ただ単に、「近づく」ということではなくて、「連れて

行く、手引きして紹介する、謁見(えっけん)する…」という意味なのです。この言葉は、来賓(=招待されてきたゲスト)を国王のもとに案内する接見役が使う言葉だったので。…つまり、イエス様が接見役として、私たちを真唯一の神様のもとへ案内して下さったから…、「私たちは確実に神様に受け入れられるのだ」という確信をもって、私たちは大胆に神様と近づくことができます！ということなのです。

ですから、本当に救われて…、そのことの確信を持っている私たちは、神様という御方が如何に偉大な御方で…、どれほど聖く、正しくて、罪を憎まれる御方で、自分の正反對の御方であるとしても、「私は、イエス様の血によって、神様に近づくことができます！」という強い確信をお持ちでしょ？もし私たちの救いがあやふやなものなら…、もし、イエス様の案内というものが無ければ、私たちは聖く正しい神様に対して、安心して近づくことなど到底できなかったのです！…だって、旧約の時代は、神様の聖さ正しさの故に、イスラエルの民たちは、神様に近づくことに対して、非常に恐れを抱いていたじゃないですか！私たちは今、そのような思いを持つ必要は無くなったのです。

そして、同じ 18 節、『両者ともに一つの御霊において…』とあります。イスラエル人であっても…、また、異邦人であっても、同じ聖霊なる神様が、その人に働きかけて、『罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせ…』(ヨハネ 16:8)てくださるのです。それについては、私たち、もう既に、エペソ 1 章で学びました…。例え誰であっても、等しく…、聖霊なる神様の働きによって、人は救われるのです。

●皆が、同じ「神の家族」とされた！

「だから！」と、パウロは続けます。19 節の、『こういうわけで…』という言い回し(ἀρα οὖν)は、これまでのことを受けて、結論を導くための接続詞句なのです。19 節、『こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。』⇒つまり、私たちは、それぞれの功績や努力などによって救われたのではなく…、皆、同じ、聖霊なる神様によって救われたが故に、同じ共同体…、同じ神様の御国に属する国民であり…、皆、神の家族とされたのです。『聖徒』という言葉(ἅγιος)は、「神によって選ばれた者、神によって、この世から選び分けられた者」という意味です。もはや、私たちは、神様の契約、神様の祝福の外側に居ないのです。だから、ここでも、『他国人でも寄留者でもなく…』とあるわけです。

皆さんは、こういった経験をお持ちだと思います。ほとんど面識が無い…、それこそ、文化が違う、話す言葉も違うし、受けてきた教育も違う、育ってきた環境も何もかも違う。しかし、信仰だけは同じという感じです。…例えば、私たちの教会には、つい最近まで、中国人の梁ちゃんが居ました。梁ちゃんと私たちは、それこそ、育ってきた国も文化も違いました。梁ちゃんが初めて、この教会に来てくれた頃は、なかなか日本語も通じなくて、私も、英語で話しかけたけど、英語の方がもっと通じなかった、なんてことがありました。でも、私たちは、梁ちゃんとも一致して、仲良くやってこれたでしょ？…それは、同じイエス様を信じ、そのイエス様のみこころを求め、そのみこころに従っていきたい！という思いで一致していたからじゃありません？

また、この教会には、コロナ禍は別として、基本的に毎年アメリカから IBC の短期宣教師たちが来てくれています。その IBC の短期宣教師たちとも、英語での意思疎通に関しては問題がありますが、それ以外の部分…、例えば、聖書の解釈や神様への畏敬の念であったり、聖書のみことばを重んじたり、イエス様のことを愛し、従っていきたい！という思いに関しては、かなりの部分で心が通じ合いますでしょ？

もちろん、教会のメンバー同士でも同じです。例え、年代が違っても…、あるいは、性別が違っても、生

まれた環境や家族構成などが違っていたとしても、大きな部分で…、大事な根本の部分で分かり合えるじゃないですか！それこそ…、長年連れ添った夫婦でも、ちぐはぐな場合もあります。なかなか分かり合えない時もあります。しかし、私たち、主にある家族たちには、言葉でもなかなか説明できないほど、じっくり分かり合える部分があるでしょ？それも、神様の与えてくださった…、救いの恵みの一部なのです！

●「神の家族」である教会の霊的構成

20 節以降で、パウロは、**私たち救われたクリスチャンたちの共同体を、『主にある聖なる宮、神の御住まい』**であると言っています。つまりは、「神の神殿である」ということです。そのことを語る上で、パウロは、まず、建物の土台と礎石（＝柱の沈下を防ぐために、柱の下に据えておく石）について語ります。

まずは土台です。20 節では、『**使徒と預言者**』とあります。使徒とは、この時代に活躍した…、イエス様から直接教えを受けた、キリストの復活の証人たちのことです。そのほとんどは、イエス様が選ばれた、あの12人の弟子たちでした。また、預言者とは、「神様から語るべき言葉を託された方たち」のことですが、すぐ後の3:5や4:11の使われ方を見ると、特に、新約聖書が書かれていた時代に活躍した者に限定されるようです。あるいは、新約聖書を書き記した者たちのことをも指すと考えられます。

その…、『**使徒と預言者**』たちの教えの中心とは何だったでしょう？⇒言うまでもなく、イエス・キリストでした。それこそが、私たちの建物の礎石なのです。イエス様が、私たちの罪の問題を解決してくださったから、私たちは神様に近づける者となりました。ですから、私たちが、このイエス様との個人的な関係にないと、私たちが神の建物を建て上げていくことは決してできないのです。

また、私たちの成長の秘訣もイエス様です。21 節に、『**この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となる…**』とあります。この当時の建物は、基本的には、石造りでした。1つ1つの石の大きさなどは違って…、主はそれらを1つ1つ組み上げられるのです。これは、明らかに、救われた者の集まりである、教会のことを言っています。ここにおられる皆さんが、組み上げられたということは…、逆を言うと…、その中の1人でも欠ける時…、その建物は大きな損傷をこうむるということです。ここで、『**組み合わされた**』と訳されている言葉(συναρμολογοῦμαι)は、「ピッタリ合うように接合する、一緒に組み合わせる…」ということを教えていて、この言葉がキリスト教以外の文献では見つけることができないことから、考古学者たちの中ではパウロが作った言葉ではないかと考えられているのだそうです。しかし、その言わんとしていることは分かります。1人1人の協力と、助け合い、支え合いが必要だということです。この言葉は、新約聖書では、たった2回しか使われていないのですが、もう1ヵ所は、エペソ4:16で、そこでは、『**キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働かす力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。**』とあります。⇒つまり、**教会の益々の成長のために、皆さん1人1人が必要だ**というのです！

「自分一人くらいサポートも…」というのは、聖書的にはありません。神様は、あなたをこの教会へと召してくださり…、あなたを通して、この教会全体を益々、成長させようとしてくださっておられるのです。ですから、どうぞ、探してみてください！もし、あなたが心を開かれるなら…、必ず、あなたの居るべき場所や奉仕が教会にはあります。問題は、「自分には居場所が無い…」と、勝手に思い込んで否定的になってしまうことです。神様は完全な御方です。必要の無い方や意味の無い方を、どの教会であつたとしても、導かれることはなさいません。そうじゃありません？

確かに、神様は私たち救われた者たちを「**神の家族**」としてくださいました。しかし！それだけで「**ずっと分かり合える！支え合える！**」かと言うと、そうでもありません。確かに、そのベースは神様が与えてくださいました。でも、それ以降は、私たちの側の努力も必要なのです！

22 節、『**このキリストにあつて、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。**』⇒『**キリストにあつて**』、救われたクリスチャンたちが集められて…、基本的には、すべての教会が構成されています。しかし、聖書は、もっとすごいことを、ここで教えてくれています。そこには、『**御霊**』、つまり、聖霊なる神様の働きによって、神が住んでくださるというのです！

旧約時代、神の知恵に満たされたソロモン王様は、**1列王記 8:27-30**で、こう教えてくれています。『**27 それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。28 けれども、あなたのしもべの祈りと願いに御顔を向けてください。私の神、【主】よ。あなたのしもべが、きょう、御前にささげる叫びと祈りを聞いてください。29 そして、この宮、すなわち、あなたが『わたしの名をそこに置く』と仰せられたこの所に、夜も昼も御目を開いてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。30 あなたのしもべとあなたの民イスラエルが、この所に向かってささげる願いを聞いてください。あなたご自身が、あなたのお住まいになる所、天にいまして、これを聞いてください。聞いて、お赦しください。』**

⇒このみことばは、『**天も、天の天も**』、偉大なる神様をお入れすることはできません、と教えてくれています。その通りです！天地万物を造られた神様は、例え、全宇宙でさえもお入れすることはできません。じゃあ、「神の宮、神殿」とは、一体何なのでしょう？…実は、天の神様は、私たち人間に分かるような形で、神様の存在について…、神様の御性質について…、私たちに明らかにしてくださいました。それが、神の住まいであり…、神の宮なのです。…そうじゃありません？

つまりね、皆さん。皆さんが神様を信じ、主によって成長させられ、与えられた働きをなしていられる時に何が起るかと云いますと…、救われた皆さんや教会を通して、真の造り主なる神様のいらっしゃることや…、そして、神様とはどのような御方で、どんなことを愛し、どのようなものを憎まれるのか、ということが、益々明らかにされていく！ということなのです。神様は、救われた皆さんのことを用いて、偉大なる神様御自身を現わしてくださるのです…。ある意味においては、それが私たちの生きた証しであり、礼拝でもあるのです。もちろん、こういったことは、救われた個人個人に対してだけではなく…、また、救われた者たちが集まった教会に対しても、神は同じことをなしていかれます。

皆さん。それって、すごいことではないでしょうか！私たちがのような者を通して…、目に見えない神様は、御自分の存在や、御自分の御性質などを現わしてくださるというのです。だから、みことばはこう教えるのです。1コリント6:19-20、『**19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。』**…また、1コリント10:31、『**こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をすることも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。』**

⇒みことばが、このように教えてくれているということは、私たちは、神様の助けによって、こういったことが、つまり、神様の素晴らしさを現わしていくことができるということなのです。…ですから、どうぞ、まずは、救われた恵みを感謝する者であってください！そして、自分が生かされている目的を、しっかりと覚え、大胆に神様に仕える者であり続けてください！そして、どうか、あなた自身を通して、神様の御性質や、神様が如何に素晴らしい御方であるかを現わしていかれます！

<励ましの言葉>

最後に、もう少しだけ、お時間を頂いて、じゃあ、どうすれば、私たちが神様の栄光を現わしていくことができるのかということ、8つのポイントで、簡単に説明させていただきます。まずは、私たちが救われるということ

は大前提ですが、それはまあ番号で言えば0番です。そうして、その次の、①1つめは、へりくだることです。ピリピ 2:3-4 に、こうあります、『3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人自分よりもすぐれた者と思いなさい。4 自分のごとくだけでなく、他の人のことも顧みなさい。』⇒神であられ、同時に救い主でもあられたイエス様は、普通なら奴隷がするような…、弟子たちの足を洗ったり、あるいはまた、イエス様御自身が自ら進んで呪われた者となってくださったでしょ？イエス様は、私たちのような者を救うために…、いのちまでも捨ててくださったのです！私たちは、その模範に倣って、へりくだることを学ばされたはずで。私たちの罪や人間関係の問題の根本は、自分を優先し、自分が正しいとするところにあるのではないのでしょうか？イエス様の究極のへりくだりを見る時、私たちは自分のなすべきことを示されるのです。

②次は、みことばを実行することです。ピリピ 2:13-14、『13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。』⇒救われて、神様のものとされたクリスチャンが、みことばに沿った歩みをしていくことは当然のことです。そうする時…、神様は、あなたに対して、あなたのなすべきこと…、あなたの進むべき道…、つまりは、あなたへのみこころというものを示していただくのです。

③3つめは、互いに愛し合うことです。聖書全体を通して、間違いなく教えられることは、愛とは、自然に湧き上がってくるような感情などではなく、私たちの選択であり、私たちの意志です。だから、聖書には、何度も、「愛しなさい！」という命令があります。1ヨハネ 3:10 と 14、『10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。… 14 私たちは、自分が死かいらいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。』⇒ここでも、はっきりと教えられてるように、私たちは主にある兄弟姉妹を愛する者とされましたよね？

④4つめ、互いの徳を高め合うことです。1テサロニケ 5:11、『ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。』⇒相手のことを愛するが故に…、その人の祝福のために祈り…、その人にとっての良いことをしてあげようとするのです。それを神は喜んでくださいます。

⑤5つめ、互いに赦し合うことです。エペソ 4:32、『お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。』⇒私たちの誰一人、完全な人間はおりません。それどころか、多くの部分で間違いを犯してしまう者です。…だからこそ、私たちは、まず、自分が相手を赦す者となっていくことが必要なのではないのでしょうか？

⑥6つめ、永遠を見据えながら、生きていかれることです。1ペテロ 1:13、『ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。』とあります。私たち人間は皆、弱者です。だからこそ、神様は、私たちに励みとなるように、「ほうびを与える！」と約束してくださったのです。どうか、目先の利益や誘惑に負ける者とならないで、主の与えてくださるほうびを…、永遠を見据えて歩いてください。

⑦キリストだけを誇ることです。ピリピ 3:7-8 に、『7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。…』とあります。かつて、エリート中のエリートであった、パウロが誇りとしていたものは何だったでしょう？自分の生まれた家系だったのでしょうか？それとも、人も羨む学歴だったのでしょうか？いいえ、パウロは、それらを「損…、ちりあくと知っている」と言いました。パウロが誇ったのは、彼を救ってくださった神様であり、イエス様だけだったのです。

⑧最後8つめ、常に御霊に満たされて生きていくことです。エペソ 5:18、『また、酒に酔ってはけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。』⇒残念なことに、私たちの内には今なお、罪があ

ります。だから、私たちには、罪との葛藤や誘惑があるのです。聖霊は、私たちの内に居て…、私たちを正しい方向に導いてくださる助け主です。今日のみことばにありましたように、「皆さんが、イエス様を信じて救われたのなら、皆さんは聖なる宮とされ、御霊によって神の御住まいとなる」のです。聖霊なる神様が、私やあなたの内にあって、神の御業をなしてくださるのです！必要なことは、私たちが御霊の邪魔をしないことです。

そのためには、いつもいつも、神様のことを意識していくことです。そうして、その神様が喜んでくださるよう歩み続けることです。そうして、「その結果をも神様は導いてくださる！最善をなしてください！」と信じて、すべてを神様にお委ねして生きていくことです。

どうか、神様のなしてくださることに期待と感謝をもって、みことばを実践する者となっていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。